

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：21403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K11958

研究課題名(和文) 昭和戦後期日本におけるデザイン概念の成長と拡大：応用美術からモダン・デザインへ

研究課題名(英文) From Applied Art to Modern Design: The Development and Multiplicity of Design Concepts in Postwar Japan

研究代表者

天貝 義教 (Amagai, Yoshinori)

秋田公立美術大学・美術学部・教授

研究者番号：30279533

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：終戦後の1940年代後半に「工芸の再建」から出発した戦後日本のデザイン概念は、1950年代後半からの「グッド・デザイン運動」によるモダン・デザインの啓蒙と普及を経て、1960年代からの経済の高度成長のもとでの大量生産と大量消費に対応して多様化した。その後、1970年代後半から1980年代にかけて、勝負勝が指摘するように、モダン・デザインから大きく飛躍する必要性が生じた。この飛躍は、1960年代後半からのコンピュータ・テクノロジーとプログラミング言語の発展と密接に関連しており、また、あらゆる創作活動を包含することとなったポスト・モダンの日本のデザイン概念を特徴づけることとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来のデザイン史研究はモダン・デザインを中心に記述されてきた。本研究も応用美術の克服から生産技術の進歩に対応したモダン・デザイン概念への展開として、昭和戦後期の日本のデザイン史を記述しようと試み、その展開課程におけるデザイン概念の多様性を明確にしようとした。しかしながら、戦後のデザイン運動をめぐる勝負勝に代表される議論を分析することにより、70年代から80年代に、モダン・デザインからポスト・モダンのデザインへと「大きな飛躍」がなされたこと、この飛躍が60年代後半からのコンピュータ技術とプログラミング言語の発展と密接に関連していたことが明らかになり、新たなデザイン史の記述が可能になった。

研究成果の概要(英文)：Starting with the 'reconstruction of crafts' in the late 1940s after the end of the war, the concept of design in post-war Japan diversified in response to mass production and mass consumption under the high economic growth from the 1960s, after the spread of modern design by the Good Design Movement from the late 1950s. Subsequently, from the late 1970s to the 1980s, as Masaru Katsumi points out, there was a need to make a great leap forward from modern design. This leap linked closely to the development of computer technology and programming languages from the late 1960s onwards. It characterised the post-modern Japanese concept of design encompassing all creative activities.

研究分野：デザイン史

キーワード：ポスト・モダニズム モダン・デザイン グッド・デザイン運動 応用美術 工芸の再建 コンピュータ・グラフィックス プログラミング言語 デザイン史

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

第二次世界大戦後の日本において、広く普及したデザイン概念については、しばしば指摘されるように「工芸」から「デザイン」への変化として記述され、そこでは「応用美術からの決別」「応用美術の克服」などが主張されてきた。こうした主張の基礎には、明治維新以降、主としてヨーロッパから導入された応用美術の思想にかわって、第二次世界大戦前後に登場したイギリスのハーバート・リードやアメリカ合衆国のエドガー・カウフマン・Jr.らによって定義づけられたモダン・デザインの理念があった。応用美術の考えとは、歴史的な美術が具体化してきた形態や装飾を工業製品に応用し、その美的価値を高めようとするものであり、戦後の多数のデザイン史研究は、こうした美術を応用するという造形思想からの脱却と克服を通じて、モダン・デザインの理念が普及したとの観点からデザイン史を記述してきた。そこでは、モダン・デザインを特徴づけるものとして、とくに工業製品について、「材料に忠実であること」「機能主義にもとづくこと」「簡素な形態であること」などを理想とするグッド・デザインの考えが指導的理念として強調され、その後、1960年代の高度経済成長を経て、建築、工業デザイン、グラフィック・デザイン、クラフト・デザイン、テキスタイル・デザインなど様々なデザイン分野において、モダン・デザインにとどまらない多様なデザイン概念が成長したとされている。

戦後の日本におけるモダン・デザインの啓蒙と普及に大きな役割を果たしたものとして、日本のグッド・デザイン運動の指導者のひとりである勝見勝が1950年代後半にまとめた『現代デザイン入門』（鹿島出版、1960）が挙げられるが、そこでは、「応用美術に対決すべきデザイン運動は決定的に勝利を収めていない」とも記されており、モダン・デザインが日本において完全に普及していなかったことが読み取れる。また、同じく勝見勝による1980年代の「ジャパン・スタイル」をめぐる論説では、グッド・デザインを中心としたモダン・デザイン理念からの「大きな飛躍」が必要となったことが強調された。勝見勝の言う「大きな飛躍」については、多様なデザイン概念の成長を指すものとして、その意味を読み取れるが、現在、そのデザイン史的な意義は明らかになっていない。また、この「大きな飛躍」は、1960年代後半から発展をみせるコンピュータ・テクノロジーとプログラミング言語の発展と関係があると考えられるが、これに関するデザイン史的研究はほとんどない。こうした背景のもとに本研究は構想された。

2. 研究の目的

本研究では、昭和戦後期の日本のデザイン概念の成長と拡大について、そのプロセスを「応用美術からモダン・デザインへの変化」として考察し、モダン・デザインの振興と普及がグッド・デザイン運動に特徴づけられていたことを明らかにするとともに、1960年代以降の日本における多様なデザイン概念の成長のなかに、グッド・デザイン運動への批判と反省があったこと、さらに、1970年代以降の「モダン・デザインからポスト・モダンのデザインへの変化」が、1960年代後半からのコンピュータ・テクノロジーとプログラミング言語の発展によって特徴づけられたことを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、戦後の1946年に復刊された「工芸ニュース」に加え、1950年代後半に創刊された「リビング・デザイン」「デザイン」「グラフィックデザイン」、1960年代後半に創刊された「デザイン批評」などデザインを専門とする雑誌にみられるデザインをめぐる論説について、研究目的にそって分析と考察をおこなう。そのさい、特に、デザイン理論家として、小池新二・勝見勝・阿部公正・出原栄一・川野洋らの美学的立場からの主張に焦点をあてるとともに、制作者側からの主張として剣持勇・粟津潔・磯崎新らの論説に焦点をあて、モダン・デザインの振興から、「戦後デザインの終焉」の主張を経て、ポスト・モダンのデザインへの変化のプロセスを明らかにする。

また、コンピュータ・テクノロジーとプログラミング言語の発展と多様なデザイン概念の成長との関係については、C言語ならびにPythonなどのプログラミング言語による単純な画像の構成を実践的におこない、川野洋が『ネット・ワークの美学』（東信堂、2009）で主張した「ポストモダンの世界像」について考察し、モダニズムのデザイン理念からポスト・モダニズムのデザイン理念の変化を特徴づける新たな世界観について明らかにする。

4. 研究成果

戦後に復刊された「工芸ニュース」、それに続いて創刊されたデザイン専門雑誌にみられる論説の分析から、終戦直後には、「工芸の復興」がめざされていたことが明らかになった。その後、1950年前後から、小池新二の主張に代表されるように、工芸にかわってデザインの振興が主張されることとなった。こうした1950年代のデザイン振興に関しては、'Japanese Concepts of Modern Design in the 1950s: With Special Reference to Isamu Kenmochi and Masaru Katsumie' と題した論文において、アメリカ合衆国におけるグッド・デザイン運動を手本として、日本のモ

ダン・デザインが方向づけられていたことを明らかにした。また、明治維新以降の応用美術の考えからモダン・デザイン理念への変化については、“Japanese Design Concepts from the 1870s to the 1950s: The transition from applied art to modern design”と題した図書を出版した。

並行して、C言語ならびにPythonによる単純な画像の構成の実践的研究をおこない、「立方体の展開図を使った組合せパズルの構成とプログラミング」と題して口頭発表をおこなった。また、「『生成美学』に関する実践的研究」と題した論文において、1960年代後半に登場した「生成美学」と結びついて登場したコンピュータ・グラフィックスが「乱数」によって特徴づけられることを考察するとともに、その後のコンピュータ・グラフィックスが「組み合わせ論」によって特徴づけられることを実践的に考察し、川野洋の主張する「ポストモダンの世界像」の一端を視覚化した。また、きわめて単純な画像の構成にとどまった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 天貝義教	4. 巻 10
2. 論文標題 「生成美学」に関する実践的研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 秋田公立美術大学紀要	6. 最初と最後の頁 31 42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天貝義教	4. 巻 78
2. 論文標題 1911年トリノ万国博覧会と平山英三	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 デザイン理論	6. 最初と最後の頁 5 19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 天貝義教	4. 巻 79
2. 論文標題 立方体の展開図を使った組合せパズルの構成とプログラミング	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 デザイン理論	6. 最初と最後の頁 60 61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 天貝義教	4. 巻 7
2. 論文標題 単純な箱詰めパズルの構成とプログラミング	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Beak 秋田公立美術大学 人間形成プロジェクト研究活動報告	6. 最初と最後の頁 4 18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天貝義教	4. 巻 3
2. 論文標題 アメリカにおけるパウハウス：ジョセフ・アルバースの教育活動を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 DNP文化振興財団 学術研究助成紀要	6. 最初と最後の頁 168 176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天貝義教	4. 巻 1
2. 論文標題 ウィーン応用美術大学の改革	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 「デザイン教育史の国際的比較研究」報告書	6. 最初と最後の頁 250 263
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天貝義教	4. 巻 72
2. 論文標題 針貝綾著『ユーゲントシュテルからドイツ工作連盟へ 世紀転換期ドイツの美術工房と教育』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 デザイン理論	6. 最初と最後の頁 126 127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 天貝義教
2. 発表標題 立方体の展開図を使った組合せパズルの構成とプログラミング
3. 学会等名 意匠学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yoshinori Amagai
2. 発表標題 Japanese Concepts of Modern Design in the 1950s: With Special Reference to Isamu Kenmochi and Masaru Katsumie
3. 学会等名 ICDHS 10th+1 Barcelona 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Yoshinori Amagai	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Independently published	5. 総ページ数 96
3. 書名 Japanese Design Concepts from the 1870s to the 1950s: The transition from applied art to modern design	

1. 著者名 Yoshinori Amagai	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Universitat de Barcelona	5. 総ページ数 855
3. 書名 Back to the Future: The Future in the Past	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関